未刊室町後期歌会資料―釈文と略解題―(二)

武井和人
酒井茂幸

「校勘の方法に関する基礎的研究」
（平成二三～二五年度・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究、研究代表者＝武井）
「中世後期歌会資料の総合的研究」
（平成二四年度・埼玉大学研究機構プロジェクト（研究費）《一般研究②外部資金獲得促進研究》、研究代表者＝武井）
による研究成果の一部を含む。

（武井和人）

【緒言】

小論は、未刊のまま多く残されてゐる室町後期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としたものである。

今回の小論では、歴史民俗博物館蔵高松宮本の中から、以下の未刊歌会資料三点を選び、釈文を示し、併せて略解題も付した。各歌会の本格的な考証は、今後の課題としたい。

1 崇徳院法楽百首（H―六〇〇―三三九）
2 磯の玉藻（H―六〇〇―一四四四）
3 宗祇三回忌追善和歌（H―六〇〇―三四二）

なほ、略解題末尾に当該歌会資料の釈文・略解題の担当者を（　）に入れて示した。ただし内容は、武井・酒井両名で相互に検討した。

釈文作成にあたり、以下の方針に従つた。

(1)漢字は常用漢字を除き、原本に近い字形を可能な限り採つた。
(2)丁移りを、」一・」一一の如く示した。
(3)底本の書誌は、各々の略解題を参照されたい。

小論は、

1 崇徳院法楽和歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H－六〇〇－三三九）〕

【釈文】

「崇徳院法楽百首 将文 軍家 十一年四月廿六日」（外題〔打付書〕）

立春

このねぬるとふのすかこも三冬つき　あさけのとかに春はきにけり　義－

霞

松やまのはるのみとりをたちこめて　かすみも千世の色は見えけり　覚恵

鶯

春をへていく世かなれむ窓ちかき　竹を友そときなくうくひす　義－尚

残雪

はるさむみのこれる雪の白ミねや　きえせぬ名のみ世にも降つゝ　雅康

野若菜

君かためおいせぬわかないくはるか　よはひをのへに出てつまゝし　兼顕

里梅

さく梅も九かへりのはるのいろを　ならはぬ里に誰なかめけん 有注　為広

簷梅

おもひいつや雲井にとをき軒はにも　みし梅つほのあかぬいろかは　基綱

春月

山のはをのほれる月のひかりまて　かすみそへたる春の夜のそら　政元」一

春曙

鳥のねものこりてかすむ月影に　あけほのおしき春の夜のそら　政国

帰鴈

雲井ちやこゑをかはしてゆくかりの　つはさもかすむはるの夜の月　政重

春雨

くもる日の影たるあるにさほひめの　ころも春さめほしやわふらむ　貞宗

柳

春のかせをよそにみせてやあさみとり　なひく柳のかつらきのやま　勝益

待花

さきやらてかすむ梢もはなとのみ　おもひなしてやこゝろやすめむ　政行

初花

よそにのみいつはる雲のさくとみて　けさよりみねの春のはつはな　桂厚

見花

雲霞なひくたかねのはなの色は　みてもをよはぬこゝろなりけり　通秀

盛花

やま風もおさまる四方の春のはな　さかりしられてちるにほひかな　賢盛」二

落花

さけはちるはなにかそふるとし月の　かきりもしらぬ行すゑの春　玄就

欸冬

はることの手向とそなるいはぬ色に　さく山ふきも心あるらし　元為

藤

千世かけんわかはの松のゆく末も　さしてそ見ゆる宿の藤なみ　長恒

暮春

わか君は千よにちまたの国なれは　くれゆく春もおしからぬ哉　元景

更衣

をしなへて世のならひとや花のかの　ころもをかふる夏は来ぬらん　元家

卯花

うのはなの月のかけさす木のもとは　露さへみかくたま川のさと　元保

待郭公

ほとゝきすとひこぬたにもすむ月に　まつを初音のおもかけにして　元重

聞郭公

まちよはりうちぬる夜半の手枕に　夏おとろかす山ほとゝきす　通家」三

早苗

くれぬとていそくさなへの一ふしに　うたふ田歌の声しきる也　元季

橘

にほひ来る花たちはなのそてなれて　むかしわすれぬ軒の夕かせ　通隆

五月雨

あまの川水やなからん日かすへて　雲をもりくるさみたれの比　範光

夏草

ふりうつむ雪はひかけも分にしに　山ちたえぬる夏くさのころ　成孝

夏月

夏のよの雲のなみゆくつきのふね　あくれは影のとをさかるらん　元信

鵜川

うかひ舟かへさになるやしらなみの　いろに明ゆくかゝり火の影　正光

蛍

うは玉のやみに影そふ夏むしは　くらきやなれか光なるらん　元隆

夕立

おきつかせあら磯なみの音たかみ　さみねの嶋にかゝる夕たち　義一」四

蝉

あまつ空のくもるのみかはなく蝉の　こゑにも杜のうちしくれぬる　氏俊

納涼

山陰のゆふへすゝしくむすふ手の　そてにや夏をわすれ井の水　元親

夏祓

神かせやみもすそ川にみそきして　けふ立なみに暮る夏かな　長盛

初秋

うらちかみ今朝ふく風にさそはれて　より来る舟や一葉なるらん　賢明

七夕

いつの日か二のほしの中かはや　あふせはしめの秋のよの空　賢兼

荻

うへをきて軒はの荻に松かせは　いく秋むすふ契りなるらむ　賢保

萩

をく露やよそにしられぬ時雨にて　はきのにしきの色をそむらん　貞秀

虫

何の世のあきより草のいろ〳〵に　つゆをやとりと虫のなくらむ　貞光」五

雁

なく声も又へたゝりぬいつくをか　雲井の雁のさしてくるらん　経孝

鹿

つまこふるわか夕くれと松やまに　いく秋なれぬさをしかの声　通秀

秋夕

むかしおもふ秋のあらしのはけしさに　里の名きくもうちの夕くれ　覚恵

秋田

なるこ引田中の庵のとまをあらみ　もる秋かせの身にやしむらん　義一尚

山月

やまの端をこきはなれなは久方の　月の御舟にかちかくしてよ　雅康

野月

花の色にうつろひかはるかけなれや　野への千くさの露の上の月　義一

関月

なく鳥のこゑよりあくる関のとに　をくれてこゆる夜半の月哉　元右

橋月

よさのうみや空のみとりもひとつにて　つきにわたせる波のうき橋　為広」六

浦月

身をうらのあまとやならん月にさへ　みるめをはらふ秋の夕なみ　弥四郎

菊

君そみんよはひを契れやま人の　千世のかさしのしら菊のはな　元種

擣衣

吹をくるあらしに音はすかはらや　伏見のさとにころもうつらし　保定

霧

浪のうへをいろとりわけてうすくこき　ゑしまかいその秋のゆふ霧　兼顕

杜紅葉

そめいたす木〻のもみちの色そこき　たれその原のあるしなるらん　景行

河紅葉

立田河もみちなかるゝみなかみや　木するゑにかよふあらしなるらん　景頼

暮秋

うかりつるならひにこえてけふといへは　身をみにしめてくるゝ秋哉　元親

時雨

代ゝふれと色もかはらぬまつ山や　しくるゝ空に冬をしるらん　賢貞」七

落葉

紅葉はもなれかちるへき時やしる　何やま風をさのみうらみん　貞秀

霜

松の葉にふりをける霜のふることも　ことはのはなにさかせてしかな　長弘

寒草

かれのこる草にも霜のはなさけは　風いとふ露のこゝろをそしる　足阿

冬月

はれくもりたゝよふ雲のたえ間より　月もしくるゝやまのはの空　勝益

氷

今朝ははやみきはの氷とちわけて　よるへにまよふ浪のをとかな　政重

霰

松山や代ゝにふりにしことのはの　玉をのこしてちるあられかな　政行

千鳥

夕まくれ友よひかはしゆくかたも　あやな川辺になく千とりかな　政国

水鳥

いかはかり浪はさえけん水とりの　雲をみきはのあかつきの声　桂厚」八

浅雪

松やまのふもとのちりも埋れす　はれゆく雪のあさ明のそら　元為

深雪

まつ山やえたをならせる風もなく　峯しろたへにつもる雪かな　元家

神楽

うちしめる庭火の影にしるきかな　とるさか木はも霜やをくらん　覚恵

鷹狩

御かり人とたちのま柴ふみならし　ふるき跡みる雪の中かな　賢盛

炭竈

にきはへる民のしるしに炭やかぬ　さともけふりのふかき山かな　玄就

歳暮

くれて行としをかさねてあふきみる　君かよはひは神そまもらん　道秀

寄月恋

秋のよの雲はうらみもなみたさへ　空にや月の影やさすらむ　通隆

寄雲恋

たのめてし夕もえやはま朝やまの　嵐のすゑにまよふうき雲　為広」九

寄風恋

うらみよとせめてをしふる人もかな　秋ふくかせのつらきやとりを　長恒

寄雨恋

よそにたつ人のゝろのうきくもや　夕くれことのそてのゆら雨　元季

寄露恋

おもひあれは草木もかへぬ我袖に　なにをかたねと露かゝるらん　雅康

寄山恋

逢事はさてもいつをか松やまの　鹿も秋こそ音をはなきけれ　成孝

寄原恋

小さゝ原かりに逢よのつゆのそて　むかしの玉のゆかもまさらし　覚恵

寄海恋

とこのうみなみたみちくるしほあひの　あはゝやそてのひかたともせん　元重

寄橋恋

みしかよをわか中空のちきりとや　あたにかけをく夢のうきはし　元信

寄関恋

恋わひてまれにあふ夜のほともなく　あくるをとむるせき守もかな　元隆」一〇

寄木恋

待人はけふもこすゑのしたかけに　ちきらぬ夜半の月そもりくる　貞秀

寄草恋

とひたゆるこゝろそつらきしのふ草　下葉の露はきえもはてなく　正光

寄虫恋

虫のこゑもちきりし色もかれはてゝ　我身ひとりにかへる秋かな　元右

寄鳥恋

池にすむよをゝし鳥もかくはかり　つかはぬ床にねをや鳴らん　兼顕

寄獣恋

まつ人やしのひきつらんさよふけて　とかむる犬のこゑそきこゆる　義一

寄玉恋

いかにせむなみのしら玉つゝめとも　そてにたまらぬたきのなかれを　賢盛

窓鏡燈

きぬ〳〵の中猶こひのますかゝみ　たちそふものは人のおも影　通家

寄枕恋

たのめすよこよひもひとり敷妙の　枕ならふる人のおもかけ　賢兼」一一

寄衣恋

おもひあまりゆめにやみると打そぬる　かへすころもをなかたちにして　元種

寄緒恋

いつよりかたえぬおもひをしるいとの　くることさはるふしとなるらん　基綱

暁鶏

（貼紙）鳥のねにいかてあしたのまたれまし　つかへぬよはもある身なりせは　為広

松

みきりなる松のみとりもとことはに　さかゆくかけは千世へぬへし　義一尚

竹

君そみん色もかはらすとしことに　生そふ竹のよろつ代のかけ　政国

山家

やまふかくすてゝ住身もすなほなる　みちをきく世はさそなうれしき　基綱

田家

守人もみえぬやま田のいほにきて　あるしをとへは松かせの声　長盛

旅

みやこいてしさそなむかしのうき旅を　おもふにさへもぬるゝそてかな　雅康」一二

浦鶴

千世ふへきためしに今もいくあみの　うらわの鶴や声をそふらん　貞宗

述懐

いまはわれおもへはわかのうら人に　たちましるへき老の波かは　覚恵

神祇

するとをきわか枝の松のたむけ草　千とせをかけて神やうけまし　義一

祝

年をふる軒はの松の若みとり　なを幾千世もたちかさぬらむ　政元

崇徳院法楽

（六行分空白）」一三

以雅康卿軒号二楽筆壱巻

写留之

【略解題】

本書の書誌・概要に関しては、既に、『国立歴史民俗博物館資料目録［8－1］高松宮家伝来禁裏本目録［分類目録編］』（二〇〇九・三）に、以下のやうな記載がある。

崇徳院法楽百首　文明十一年。江戸中期写。一冊　〇三三九（ふ函八八）［装訂］袋綴。［法量］二七・五×一九・七。［表紙］打曇水玉文。［外題］崇徳院法楽百首文明十一年四月廿六日（原・左・直・書）。［内題］なし。［その他の題］文明十一年四月廿六日／崇徳院法楽（一三丁ウ）。［本文］半丁八行。和歌一首二行書。［丁数］全一四丁。（前掲書・一二七頁下段）

なほ、鼇頭に一箇所貼られる（暁鳥、為広詠）小紙片は、霊元院とその近臣が『新類題和歌集』編纂に際して付したものと思はれる（酒井茂幸『禁裏本歌書の蔵書史的研究』〔思文閣出版、二〇〇九・一一〕二五二頁）。従つて、前掲目録では本書の書写時期を「江戸中期」とするが、江戸初期にまでひきあげても良いかと思はれる。

本百首の伝本には、いま一つ、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵本〔五〇一・八七八〕が存する。こちらには、小紙片は貼られてゐない。

出詠歌人を見てみると、未勘とせざるをえない人物が多いが、足利義政・一条兼良（覚恵）・足利義尚・飛鳥井雅康・広橋兼顕・冷泉為広・姉小路基綱・細川政元・細川政国・大館政重・伊勢貞宗・細川勝益・二階堂政行・桂厚・中院通秀・杉原賢盛・武田玄就・垰和元為・杉原長恒・朝倉元景・大館元重といつた如く、おもだつた公武歌人が一堂に会してゐる趣がはつきりと見て取れる。

（武井和人）

2 磯の玉藻

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H－六〇〇－一四四四）〕

【釈文】

磯の玉藻」（外題〔打付書〕）

磯の玉藻」（扉題〔打付書〕）

作者

後土御門院　三品勝仁親王

式部卿邦高親王　沙門道永

沙門尊伝　按察使源俊量

権中納言藤原元長　参議右近衛権中納言源重経

参議藤原宣秀　右兵衛佐藤原永宣

詠五十首和歌　明応八年十一月廿日

春十首　御製

明行は霞たち来てほの〳〵と　春にわかるゝみねのよこ雲

白妙の袖もひとつの雪の中に　野への若菜をもとめてそつむ

春といへは朽木の梅も故郷の　苔の軒端に色をそへつゝ

氷とくる跡よりなひく川きしの　柳か枝やなみの花さく

〵そことなきかすみのうちにかへる山　ありとや雁の道もまよはぬ

くちはつる軒端にすかくさゝかにの　糸をみたして春雨そふる

〵木のめよりめかれぬ庭のさくら哉　まつまも花の咲やそむると

あしたには雲と見えつる花もまた　ゆふへの雨に色そしほるゝ」一

〵なつかしく匂ふかうへにさく藤の　うら葉をみるもあかぬ色かな

〵花鳥の名こそも春に打そへて　木ふかき宿のくるゝさひしさ

夏五首

花ころもかけるけしきにしられけり　人のこゝろのうつりやすさは

たつねてや山ほとゝきすきゝてまし　この里のみになかぬと思はゝ

〵こゝろあらは恨みそやらん郭公　まちよはる身に今はなくねを

〵よと河や船もたゝちをかよふまて　里はみつのゝ五月雨のころ

〵さゝてぬるまきの戸口のすゝしさに　夢路もやすくかよふ秋風

秋十首

秋来ぬといふよりはやく軒近き　荻のうはゝの風そこたふる

あまの河ふりさけみれは鵲の　わたせるはしはなのみ也けり

みやきのゝ木のしたよりもさく萩の　花のうへにそ露はひまなき

〵まちしまはうき雲くらき山のはの　にはかに月の空に出ぬる

わたつ海のかきりそ見えぬ明渡る　おきつ波まに月はいれとも

かすみつる月よりも猶秋きりの　空に朝日のうすき面かけ

秋風のよさむなりともわひ人の　みのしろ衣いかゝうつへき

〵夕日かけよそになり行をくら山　ちらぬもみちの色をしそ思ふ

〵杣人のすみかに今はうつさはや　いく秋をくる雲のうへの菊

さひしかるゆふへの空もなこりあれや　なかめ馴ぬる秋の別路

冬五首」二

〵なに事か思ひのこさん明やらて　しくれふる閨のともし火のかと

〵やなきちる枝はさなから我門の　一むらすゝきなひくとそみる

霜こほる枯のゝくさのひこはへと　みるや小松の青葉成らむ

〵あま衣ぬるゝかうへにさえぬらし　月もふけゆく波風のこゑ

枝しけき杉の梢はしら雪の　ふりつむ程もみぬ軒はかな

恋十首

〳〵さてもかく思ふもくるしいかさまに　心しつめて忍ひはつへき
かならすと待身にいかにたのめをく　心の末のゆふくれの雲
このゆふへおもふあたりにあくかれん　我玉しゐのしるへともなれ
夢とたに思ひもわかぬにゐまくら　おもかけのこせふかきよの空
こよひそとかねてしりせは別れうき　鐘をしはしといはまし物を
〳〵いく度もわか身（たか歟）のとかにいひなして　人のあた名はたてしとそ思ふ
同し世に此身をかへていとはるゝ　人のつらきをきかて恋はや
いつわりとかつはしりてもかこたしな　さらすは人のなさけあらめや
後の世のむくひをしらは人もまた　つらき心やおもひかへさん
〳〵人はゝやたえはてぬとや忘るらん　うきにもこりす思ふわか身を

雑十首

神祇

〳〵すみよしのあら人神のいにしへや　老木の松も二葉なりけん

尺教」三

一すちにたのむ心の道しあらは　ふたつの河は波かくる共
〳〵よしあしをわくる心の外にこそ　中〳〵ふかき道は有けれ

無常

世のなかは風のまへ成ともし火の　光ありとも身をな頼みそ

別

〳〵思ひやり思ひをくにもなくさまて　わかるゝきはそ旅は悲しき

旅

あふ坂の関のあなたも鳥かなく　あか月つきにいそく東路
〳〵峯こえてみれはふもとの道（さと）なから　ゆく〳〵遠きけふの宿（みち歟）哉

祝

〳〵神世より今にたえせすつたへをく　三種のたからまもらさらめや

物名　しよ井　地もく

〳〵いそかしやいなのゝ小さゝまくらにて　みちもくれなはたひねするとも

述懐

末の世も人はひとにて生れあふ　身は身のほともなとかなからむ

点二十五首

冬日詠五十首倭哥

三品勝一親王

春十首

色といへは春にも名にやたつた姫　霞に染ぬ山のはもなし」四
春寒み袖のみぬれてたまらぬや　かたみにくめる水のふかせか
〳〵ふみわくる跡さたかにてかけろふの　をのれと消ぬ雪まをそみる
うくひすの声をもまたしあくかるゝ　春の心ははるそさそはん
〳〵ぬしやたれ追風なからこすの中の　匂ひをゆつる軒の梅かえ
露にほふ春の柳の眉ねかき　みたれてあかぬ今朝のまをみん
〳〵かすみはてゝよふかき空になかめはや　月より外にあくる光を
〳〵松のはも槙たつかけも春はみす　花の一木のみよしのゝ山
あやにくに今をこそ見めおしまれて　ちるさへ花の色香也ける
うつろふとけさ見し露の色に猶　ゆふへはおしき庭の山吹

夏五首

〳〵夏来ては卯花やまの夕月夜　木かくれおほき光ともなし
〳〵ほのかにてきゝしをたとる郭公　いまのはつねやこそのふる声
〳〵はれ間とはいふほともなき五月雨の　雲に見えすく月もめつらし
〳〵秋の色にあはまし物を夏草の　中にひらくる初花はおし

〃下露のすゝしさしらて残る日の　こすゑを高みせみの鳴こゑ

秋十首

よのまにはをくらん草の露もなし　また秋風に朝すゝみして
まれにあふ星の契をうきことに　思ひそめぬる秋のそら哉
〃吹たひの風におきふす荻のはゝ　音なしとても哀とや見ん
〃かたよりに秋とはいわし萩か花　尾花もはしののへにこそみめ」五
思ふ方ときく人さそなさらてしも　待つけ顔のはつかりの声
〃色〳〵のむしのねきかは秋来ての　庭をは草にやつしてもみん
よそよりも月はうへなきをはすてや　ふもとはかりのかけをたにみん
うなはらやとゝこほりなき浪のうへの　月は空行物としも見す
霜にひゝき風にこたへてまちかきや　遠山かつのころも打こゑ
百草の花さく野もり我のみと　もみちの山やいひくたすらん

冬五首

〃木のは散あらしの跡の山かけは　水のひゝきそおくふかくなる
〃こゝろあるね覚よいかにみやこにも　近き川原の千鳥鳴よを
〃たえす行心をしりてゐる鳥の　飛鳥の川は氷るせやなき
みたれちるあられにしらむ閨の中や　よるの光の玉をなすらん
たか宿も跡つけかたきけさのまや　あらぬ野山の雪をとふらん

恋十首

〃はてよいかに人やりならぬ恋路とて　立かへるへき心とはなし
人にうき心もしらす忍ふ身の　涙を袖に恨みそめぬる
〃われのみはかみなみ山の秋の色　かはらし物と思ひかけてき
とはすとも恨みはあらし今よりは　頼まぬくれをまちて社みめ
いらへこてさもきかさらめいひよれは　うちもみしろく景色たになき
思ひいてゝ後は夢にもまきれしを　たゝ今のよのうつゝともなき
明やらぬまきの戸口の出かてに　やすらふ程を月やまつらん」六
〃人そ猶心もしらぬ鳥かねに　涙くらへてあかぬ別れを
〃さり共と思ひのとめしうきふしの　同しさまにてそふ恨哉
いまみるも涙のかゝるすえなきは　ふりぬる筆の跡としもなし

雑十首

神祇

しるしらすすむ夜(世)は同し石清水　わか人ならぬ人ももらすな

尺教

〃むねのうちにすまむ(める歟)もさそな秋の空　月は霧をもへたてさりけり
迷ふ身もなけかし末の法師は　つたふるまゝの道やなからん

無常

〃塵の身そ行ゑもしらぬ風ふけは　下葉にのこる草の上の露

別

をくれしとしたひし人はとゝめきて　友なき道をたれにかこたん

旅

心なをくるしきものと波風の　けふの舟路に思ふ山こえ
一夜にてよしやゐなのゝさゝ枕　猶朝きりにみちやまとはん

祝

をのつから千とせのかけを友つるの　よはひや松をしる人にせん

物名　たいはん　たかつき

〃春なから雪をや冬とまたいはん　したかつきえてのこるまゝ成」七

述懐

うき月のたれかまさると世をはたゝ　ひとり〳〵のうへにこそみめ

冬日詠五十首和歌　　点二十四首

式部卿邦高親王

春十首

〃かみ代よりいくめくりして月も日も　かはらぬ空の春を知らん
〃かすみたつ宮古の山の浅みとり　それとなきしもあかぬ春哉
もえいつといふほともなしふみ分る　跡を雪まの野への若なは
うちなひく柳にそみるうくひすの　声の匂ひもをのか羽風も
春風の空にさそへる梅かゝは　天つ乙女の袖にほふらし
さえかへる雪けの空の月かけや　霞にもれて又くもるらん
なこりをやともにしたはん春のよの　みはてぬ夢もかへる雁金
〃いつか又あくまて色のことはりを　花みる時の春にしるへき
〃ちりすさふ花の木の本尋ね来て　まよふこてふも春にさひしき
〃とゝめあへす春の日数もゆく水に　うつろひ残る庭の款冬

夏五首

山さとに春のへたてのうつきかき　おりしりかほの色もはかなし（花）
〃来つゝのみ鳴をやまたん尋ねても　我こそとはめ山ほとゝきす
〃五月雨の雲間のこしてあふち咲　外面の月そもるほともなき」八
草かくれそこともみえぬ沢水の　行ゑをとめてとふ蛍かな
わすれては秋かとそ思ふ日くらしの　なくや岡への松の下かせ

秋十首

〃秋来てもしらすいつれの枝よりか　まつちりそむる一葉成らん
としに有て一夜と思へと天川　空にやはやき逢せ成らむ
〃女郎花たれに契の秋かけて　いひしものとも色に出らん
花散し後も猶みんもみちする　下葉にあかぬ庭の村萩
〃夕されは雲ゐの雁もなく鹿の　涙あらそふ野へのしら露
〃すみのほる雲はひとつを待いてゝ　みしや里わく山のはの月
いつのまにさかりもしらて秋の月　かたふくかけを友とみるらん
〃なきよりてたのむもはかな蚕　床はよさむのあかつきのこゑ
〃いく度のね覚につくす思ひさへ　猶はれかたき峯の朝きり
立田姫心のいろのいくしほに　そめてをあかん木ゝの紅葉ゝ

冬五首

冬来てはかれ生の中の秋の菊　のこると見るもしもの花哉
〃池水のこほりに月はなかれつゝ　たれとねぬよををしは鳴らん（の歟）
明るかとみえてよふかきねやのうへや　霜よりしらむ板ま成らん
〃つもりゆくとしをはしるやをくしもに　松も老木の色そ寒けき
〃いかにせん思ひしことは跡なくて　ことしもけふの宿のしら雪

恋十首」九

ことゝはん人にこゝろををく露の　忍ふの山路ふみて迷へる
いつ迄とむせふおもひのけふりにて　下のなけきをたちはそふらん
こりすまにしたふ心を立かへり　思へは我そ人そつれなき
〃頼めたゝそれもそしるへ夢とても　おもはぬ中のみゆるものかは
〃待うかれ思ひきえぬや人の身も　ならはしものゝ夕暮の空
ことの葉にかはらぬのみもまことなき　筆のすさみのつらき跡哉
一たひのわかれよいかに逢ことを　たゝこのまゝにおもひなすとも
かはかりにあはんもかたし又いつと　なくさめをくもうき契りかな
〃いまさらに人の名をやいひたてん　なさけしらぬはうくつらく共

雑十首

神祇

〃神といふはたゝしき人の心をそ　かたちになして宿るともきく

尺教

をしへをくしるへはあれと法のかと　まことはたれか思ひいりける

あたにやは思ひなすへきうけかたく　あひかたき世の法に逢身を

無常

〃をそくとくすみはてぬみをうき艸に　さそふ水あるも哀世の中

別

都いてしなこりをさらにたひの道　をくりてかへる人にそへつる」一〇

旅

たれとなく同し道ゆくたよりをも　物いひかはし知人にせん

たとるへき里をは跡にくらしきて　遠き野中にあふ人もなし

祝

よもの海は風しつかにて君か代に　なひくや民の草葉成らん

物名　松　竹　露　亀

鹿まつとねかふ末野に日はたけぬ　山をいつるかめにかけてみん

述懐

うき事はなへて世の中それよりも　猶あまりあるみをいかにせん

点二十一首

詠五十首和哥

沙門道永

春十首

年くれし空のかよひち行かへり　空にのみして春や来ぬらん

春の色もなきそむるよりのとか成　かすみやふくむ鶯のこゑ

〃わかなつむ袖のみぬれてかたみにも　たまらぬ物はのへの淡雪

おもかけもふかき霞や日にそへて　下もえわたるまのゝかや原

木のもとはいつくなれはか春風の　袖ひく斗匂ふ梅かゝ

山のはのかすみをいてし俤の　そのまゝふくる春のよの月

花におほふ袖はかすみのから衣　たもとゆたかに立やそふらん」一一

風またて心つからとちる花は　さらぬ別のかきりとそみる

〃なかめつゝ花にうき身を忘れすは　何をか春の思ひ出にせん

花鳥の色かの外にくれのこる　春の日数はさもあれはあれ

夏五首

〃雲間もる影もそのまゝ卯花のうきねに(を歟)契る夕月夜哉

心からまつことにして郭公　人そつれなき名にはたてける

〃しのひねの山ほとゝきす山にても　聞人あらはいつちゆかまし

まくらにも同し匂ひや朝戸明る軒端にふきしあやめ成らん

〃夕立は過にけらしなふきくもる　風のうへなるちりのまかひに

秋十首

〃此朝けちるや一葉の上にたに　ふく音かはる秋のはつかせ

軒端より露そみたるゝ秋をへて　うれはは高き庭の萩はら

あけはみんもとあらの小萩夜とゝもに　ねての朝けの花も咲やと

あさけはあさあけにて候へは、此五文字

同事にて無其詮候哉

峯こえて棚引にけり天くもの　よそにきゝつる初雁のこゑ

秋の日の夕かけいそきなく虫の　こゑも葉のほる草の上の露

雲のうへの秋を契りてすむ月や　世にくもりなき光成らん

月ならてたれことゝはん夕あらし　たゝきすてつる柴の戸ほそは

〃そことなく聞えてさむし暁の　あらしをわひて衣うつこゑ
さく菊もうつろひゆきて長月の　日数を花のうへにつみつゝ」一二
時雨にもしられぬ色やをくら山　夕日にそむるみねのもみちは

冬五首

〃ちりひちの山ともなれることはりは　つもるふもとの木のはにもみつ
うき雲のしくれならねと一とをり　風にみたれて散霰かな
池水のうへにもとりの跡みるや　氷の隙のにほの通路
ふる雪のつもらぬほとや残るらん　あらしの音も松の青葉も
かきおこすほとこそなけれ山賤の　柴折たきし跡のうつみ火

恋十首

わか袖にかけてみよとや思ひいる　野ははつ草の露のかことを
しのふよの月をはをきてしるへなき　やみをたよりの道やとはまし
独ねは恋しきものとつけやらん　人のまくらにみる夢も哉
かはらしの契りはもとのちきりにて　あらす成よの身をいかにせん
〃たのめをかてまつを心のならはしは　我いつわりになるゆふへかな
鳥のねに明行よはや徒に　まちし心のわかれ成らむ
〃なけかしよ思ひもこひもさきの世の　むくひを今の人につくさは
逢事にかへし命よ明るしらぬ　今宵はかりをみに忘れても
かひなしや心のまつもつれなくて　人は軒はのわすれいてぬる
うらみわひなけきつくすもうき中に　心ひとつを千ゝにわけぬる

雑十首

神祇」一三

神も嘸千とせのかけに宮はしら　たてゝかはらぬ松の尾の山

尺教

さとりする誠のみちやはしめなく　をはりもしらぬ此身成らむ
〃さらに又（この）うへかうへなる御法こそ　世には誠のことは也けれ

無常

〃きえぬまの我身の露もあたしのゝ　草葉にかけてよそにみる哉（のみやかけてみるへき歟）

別

都いてゝ何そは有てあふさかの　関にわかれのなをとゝむらん

旅

〃同しみちにわれも日をへてうき旅の　心は人のうへにてもみつ
たひ衣きのふはわけしみねの雲を　今朝のふなてにかへりみる哉

祝

〃くりかへす念珠のかすことに　君か千とせを祈り置つゝ

物名　古今　後撰

〃くれなゐの色こき梅の下かせは　神かきよりや匂をこせん

述懐

〃さても身のさかりはいつの夢に過て　うつゝはかなく老の来ぬらん

点十五首

詠五十首倭哥

沙門尊伝」一四

春十首

春も猶たかねは雪に風さえて　麓はかりにたつ霞かな
こそのまゝ雪のふるよにもえいてゝ　また若草の色そ別れぬ
木のもとに立よるはかり匂ひきて　我そて契るよその梅かえ
をく露もちらさてよはき春風は　柳かえたにふかせてそみん
声やなをへたてぬ空に残るらむ　霞にきゆる春の雁かね

〃くらしわひなかしと思ふ春の日は　花さかぬまのすさひ也けり
〃山さくらわけのほりつゝ白雲の　うへしる花そ袖にゝほへる
〃一枝は折てかへらん山さくら　風のさそはぬ花やのこると（にまかせて歟）
かすむへきものとやいはん春の月　光を花の木間もるかけ
花鳥の色ねのみかは行春の　ことをあまたのなこりをそ思ふ

夏五首

うの花の雪には道もたとらしを　人こそとはねをのゝ山かけ
〃しのひねと思ひし物を子規　たれにとはれてなをこたふらん
うへわたす山田のさなへふし立て　木ゝのみとりのかけもわかれす
をのつから池の心もきよかれや　はちすの露を玉とみるより
〃松に吹風をもまたし苔むしろ　しくや岩ねの水のすゝしさ

秋十首

〃ちりそむる桐の一葉の露のうへに　やとるともなき三日月のかけ
秋のゝの荻のにしきを分きつゝ　たれかへるらし露の古郷」一五
〃やすらはて行へき物か花すゝき　まねく野原に松むしのこゑ
野へは今千種の花の草の原に　すむやあるしそ秋にゆかしき
〃露よりも置所なき身ひとつを　思ふも悲し秋風のころ
なかきよのね覚の床も露そをく　夕の空の秋は物かは
〃秋のよは我身（うき）のかけも忘られて　心そらなる月を見る哉
しはしたにかけをとゝめよ浪のうへに　明行月のすまの関守
ほのか成有明の月のそれよりも　みるほとなしや朝顔の花
朝な〳〵をく露しもゝ白菊の　花はうつろふ物としもなし

冬五首

冬の来てもみち流るゝ山川の　こほりて秋の色やせかまし
冬枯に色なき野へも浅ち原　霜の朝をなかめ捨めや
〃時雨つる雲のかへしの山かせに　思ひもあへす雪そ散ける
我さへに立出かたき山里の　雪にはとはん友もまたれす
〃ゆくとしをいかにしたはん春秋の　名残も更に思ひいてつゝ

恋十首　一首不足本書トモ

おもひそむる昨日けふたにくるしきに　はてはいか成心ならまし
いひ出はさていかならんとはかりに　忍ふ月日のあまたへにける
今こんといひし夕の重りて　空頼め成かきりをそしる
われも又いつはりなれや偽を　頼ますなからたのむこゝろを
迷ひける世こそつらけれ生れきて　かゝる恋路のえにしある身は」一六
はかなしや逢と見し夜の夢覚て　けさはまさしき現をそまつ
むもれ木と身をなしはてゝ名取川　うきなはたてし袖の白浪
よしさらは恋に命をかへてまし　ふみをはゆるせもしの関守
一方に思ひのたきゝこりねとや　つらき心を人はみすらん

雑十首

神祇

〃よるひるにかくれあらはれ照すてふ　月日のかけは袖（も歟）のまに〳〵

尺教

まよひけるはしめをしらはさとるへき　終りのあらん身とやならまし
まよひある世のうき雲をへたてゝも　心の月やにしにゆくらん

無常

うき事のたえてしなくは住はてぬ　此世に人や心と見まし

別

しら雲のあたなきかたにわかるとも（ママ）　めくりあふへき月日忘るな

旅

しるしらぬ人をもわかす旅のみちに　いひかたらふを友とこそすれ
海山のかへるなかめを思ふにも　古郷のみそ面かけにたつ

祝

君か代に逢坂山の関守も　戸さゝぬときやわきて知るらん

物名　けい　らいはん」一七

この朝けいか成滝そやまさくら　岩にせかれぬ花の白波
法に猶心をそめよすみ染の　袖のひとへに思ふことゝて

点十三首

冬日同詠五十首倭哥

按察使源俊量

春十首

風の音ものとか成代のしるしをは　春たつ空にまかせてやみん
はるをふる老のひはらの山かつら　昔をかけてかすむ色かな
子の日して千年といわふ言のはや　おひさきしるき松にそふらん
雪散て寒き朝けも鶯の　なかなく声は春めきにけり
なをさりに思ふに人やうとからん　宿の木末の梅の色香を
心をはしるとなけれと春の風に　とけてやなひく青柳の糸
春ことにいとふをしらて月はなと　かすむためしのさたか成らん
いつのとしいつの春にか山さくら　あく迄花をみると思はん
うすくこき心さしをも花もけに　わきてや袖の香に匂ふらん
花もちりくれゆく春のなこりには　ふる時もなきつらさ也けり

夏五首

おしと思ふ春をへたつる習ひこそ　かふる衣のうらみ也けり
まこも草ましるとすれとかをとめて　よとのゝあやめ引はまかへし」一八
聞ぬさきにをとりやはする郭公　一声鳴て過るうらみは
みしか夜の月見る比のつらさもや　つもりてはやき老と成らん
木ふかさのことゝさためて氷室山　日はもるとなき陰のすゝしさ

秋十首

音たてゝおとろくほとはなけれとも　たゝにはあらぬ秋のはつ風
雲のうへや星のたむけのむかしには　あつまのこともひく例かな
雨にしほれ風におきふす荻のはに　ひまもとめてや露はをくらん
思ひあまる涙の色か夕まくれ　をしか鳴のゝ萩のうは露
心ある袖をとはゝやわかうへに　おきける露の秋の夕くれ
さそはれて梢にもろき白露は　風のをきけるかけのした草
かはらめやいつくの里もうしと思ふ　心ひとつの秋の夕くれ
うき物といひはしめけるそのむかし　月みぬとしの秋やありけん
こゝにみるも光は同し月にさへ　心かよはぬ海山もなし
みな人のうしといひつる言のはを　うらみになして秋やゆくらん

冬五首

末の世に今もしくれのふることは　定めありける神な月かな
冬のよもあらしはきかぬ雲の上に　すみのほる月そ光りさえたる
ふしのねをさそなと思ふ詠には　うへなき物よけさのしら雪
かきくらしのこり多くも分すてゝ　おもかけにたつとりのおち艸
長き夜もあかぬ心か神あそひ　あそへ〳〵とうたふ声〳〵」一九

恋十首

忍ふさへよそめいかゝと袖のうへに　おさへもはてぬわか涙かな
いかならんいひ出してもあはれとは　しらせんほとの言のはもなし

思ひわひぬ人のつらさもみの程の　かゝらさりせはかくはあらしと

此下句かゝらさりせは
かゝらましやは後拾遺

哥同心候歟

ちきりつることはの末をたのむ夜は　たゝなをさりにまつ心かは
時のまの命をしらてけふこすは　あすはとたのむ心はかなさ（人にたのむ歟）
今つらきむくひありとも後の世に　我ゆへそとはいかてしられん
夕きりにかくれもはてすいかなれは　雲ゐの雁のうき名もれけん
つれなくて思ひもまけは大方の　とかになしてもいひかはさはや
なけかしなはてはまことのあふことに　かねてさきたつ名ともおもはゝ（うき名と歟）
われをこそわすれははてめ頼めをきし　夕はさすか思ひいつらん

雑十首

神祇

代を守る神はいつれもちかひあれは　わきてそれとはいかてあふかん

尺教

法の花さくとこそみめ草木まて　もれぬ仏のたねときくには
をろか成我みをしれはうれしさも　猶世にこゆるちかひならすや

無常」二〇

かりの身のあるをありともおもはすは　なきは数そふ世をもなけかし

別

ふるさとにやかてと思ふこゝろゆへ　いまの別はいそくとをしれ

旅

いとはやも色くちぬらし露にぬれ　こけにかさぬるたひの衣は
たひ衣日はへたてゝも故郷に　一夜の夢のゆきかへる哉

祝

千とせまてと松のよはひもきくときは　つきせぬ代にはなにをくらへん

物名

人なみにあらぬなからもつかへつゝ　みにもうれしやうこきなき世は

述懐

めくみある代にしあはすはかく斗　をろか成みをいかさまにせん

点十首

冬日同詠五十首和歌

権中納言藤原元長

春十首

あら玉の春にあひぬといくかへり　年のをなかくかそへきぬらん
朝な〳〵軒端にきなく鶯は　みやこに近き谷やいてけん
友まつといはぬはかりにのこる色を　さそひてきゆるはるの淡雪
梅かえに花はちらさて匂ひをは　さそはん為と風やのとけき」二一
のとか成はるの日かけのいと柳　かさしの玉とぬける露哉
よそにみて有へき物をこえくれは　うたて花なきみねの白雲
しつか成草の庵の雨の音を　春にしらるゝあつまやのうち
なく斗なこりおしくは心から　なとかへるさをいそくかりかね

夏五首　一首不足本書トモ

朝もよひきのふの春の木のめとも　みえぬはかりにしける比かな
ほとゝきす都の人につれなくは　われも忍ひて山やたつねん
にほはすはあやめもわかし茂りあふ　みつのまこもの同しみとりに
あはれにもほたるはみさへもえにけり　火をとるむしのたくひのみかは

秋十首

衣手のかろくおほえてけふはゝや　またれぬ程の秋のはつかせ
うけひくや二のほしもつまことの　中のほそ緒のたえぬ手向を
〃うつろへは下葉色つく小萩原　はなにのみうき風の音かは
ことし又都の山をこえそめて　まよへる雁かつらそみたるゝ
〃山にいりのへにいてゝも鳴鹿の　おもひやひとつ思ひなるらん
ねられぬはさて何ゆへのつらさそと　物おもはする月やかこたん
〃草のうへの露を命のむしのねも　うらかれそむる野辺の秋かせ
おるもおし今いくしほの時雨をも　またぬ端山の初もみちかな」二二
つく〳〵と思ふもあやし白菊の　ほそき枝よりいてし花かも
山かせの木のはをさそふかたなれや　めにみえて行秋の別路

冬五首

松のはに秋をく露のまた散て　時雨にまかふ冬の朝風
みちたえん我身のためもしら雪の　ふるかうへにもつもれとそ思ふ
〃みきはより氷そむ(ゆく歟)らし池の面に　夜ふけてとをきをし鴨の声
うつみ火のふけてきえゆく里の内は　さえかへる春の俤にして
おほけなく猶も心にたのむ哉　わひてくらさぬとしも有やと

恋十首

思ひそむるけふよりなにそ恋ころも　心の色をまつつくすらん
あひみすは忍ひはてめや世のうさを　かことになして袖の涙も
まつほとの心つかひはいつわりの　ある世悲しきならひとをしれ
契りをくことのは斗頼みにて　人めのひまをまつもはるけし
むまれあはゝあひ思ふやとむくひをは　この世なからにつくしてし哉
忘れてや人にかたらん別れての　けさの心はうつゝともなし
まれにとひてわれならぬ人に思ひしれ　思ふにまくる心なかさを
〃なかゝれと思ふ契りは絶はてゝ　あらぬ筋にものこる玉のを
物思ひも今そやかきるきぬ〳〵の　あとに命のたへんともなし
年たけて今は我身にはちぬれは　いひはしめしそ悔しかりける

雑十首」二三

神祇

〃天てらすかけもかしこく日の本に神や岩戸を明はしめけん

尺教

ふたつなく又三もなき法の道を　心ひとつに迷ひきにけり
生れあふ契はうれし世にみゆる　誓のほとを思ひとくにも

無常

しるしとてうへけん松もくちにけり　こけのした社思ひやらるれ

別

逢坂ときくもかひなしたひ人に　ゆき別れ路の関のへたては

旅

いとはしよ草の枕に古里と　忍ふも同しよもきふの宿
思ひやる心のみちはへたてめや　都の山のあとのしら雲

祝

雲の上にふきこえてそあらん(くる)君もへん　同し千年の友つるの声

物名　はなたちはな　あやめ

〃忍ふとてうとき契よおもかけはな　たちはなれてそたれかあやめん

述懐

〃うきにしも思ひはすてし世中は　うつりかへりてさためなけれは

点十一首

冬日同詠五十首倭哥」二四

参議右近衛権中将源重経

春十首

浦遠くかすみそふかきもしほ草（やく）　けふりも春に立やそふらん
〃雪きえし跡あらはれて春の野に　もえ出る草の色そ露けき
吹をくる程はまたれて梅かゝの　とまれは袖にいとふはる風
青柳のかつらき山の浅みとり　空もひとつに春風そふく
みしか夜と思ふもおしき春の月　かすめる影をいかにうらみん
〃さかぬより花に心をつくしきて　ちらん別をさていかにせん
山さくら花のあるしにみをなして　とひくる人を我やまたまし
〃春ことにあかぬ心の色そひて（へ）　老木も花（を）はさかりとそみる（や）（む歟）
入日さす野沢の水にかけみえて　あかるもおつる夕雲雀哉
いけ水に影みるふちのうら葉まて　ひとつになひく波の浮草

夏五首

これも又夢かとそ思ふうの花の　雪ふみわくるをのゝ山陰
八声なく鳥たに有を郭公　をのれつれなきあかつきの空
匂ひ来てしらぬ昔のことまても　かたるにゝたる軒のたち花
やり水の浅きなかれに影みせて　すゝしき物ととふ蛍かな
こゝをせに夏なきとしのみそき川　夕波かけて袖そすゝしき

秋十首

から衣袖もや秋の色ならん　めにみぬものゝ風そみにしむ」二五
秋のゝの真萩にましる鹿のねは　うつろふ中の妻や恋らん
秋の色にふる物そなきむしのねも　千種の花の露にみたれて
〃こよひたれ草のまくらをかるかやの　跡（末歟）しとろなるのへの朝露
うす霧のはれ行のへの秋風に　露をもとむる月のかけ哉
あまの子のさためぬ宿も浦波の　よる〳〵月に思ひやりつゝ
このねぬるよ寒の床の秋風に　ころもかり金まくらとふかけ
なへてうき秋のゆふへもみひとつに　ことはり過てぬるゝ袖哉
しほるゝをあたにはみれと朝な〳〵　咲朝かほそ盛久しき
うしといひつらしといひし秋も今　わかるゝ道になこりやはなき

冬五首

〃いくたひかぬれてほすらんはれくもり　しくるゝ比の雲のころもは
よとゝもにつれなきつまを松しまや　をしまのなみに千鳥鳴なり
〃よそにきく音たに寒き川かせを　袖にぬれてや網代守らん
雪のうへになひく煙やふしのねの　おもかけにたつ峯のすみかま
まとふかく雪吹いるゝきた風に　匂ふもあやし梅やさくらん

恋十首

〃いひ出ぬ心のいろをいつのまに　なみたはしりて袖に落らん
身をはかくなきになしてもうきにたえて　忍ふは人の為ならぬかは
かくはかり人のつらさをなけく身の　命長さもつれなからすや
つらさをもわふかひもなき身のほとを　思ひくたして人やつれなき」二六
むくひある世を頼みてや恋すてふ　身はうき物と思ひしらせん
敷妙のわか手枕にことゝはん　見えつる夢はうつゝなりやと
〃逢迄と思ひし物を別路に　又と頼めておしき命よ
ことのはのかはるを人のならはしに　思ひなしても頼みやはせぬ
〃人はいさ思ひいてしを我のみと　ふるきまくらにしたふ月影
一かたにうらみはつれはさすか又　わすれぬ程におとろかしつゝ

雑十首

神祇

内にみえ外にあらはれ世を守　神も二の宮はしら哉

尺教

仏にはへたてあらしと頼む哉　この世にすむはをろかなる身も

〃薪こり水くむわさのくるしさは思はしいはし後の世のため

無常

ぬるか内の夢に過行あたし世を　うつゝに頼む身とはしらすや

別

行末にこえん野山もそれなから　いてたつ今そあしもすゝまぬ

旅

くるゝより露こそやとれ草の原　わか旅まくら何をからまし

鳥かねはいつく成らしあつまのや　里とひかねて明すかりねに

祝」二七

〃君か世は千里の浜の真砂より　行末とをき数やまさらん

物名　さしぬき　なをし

〃遅さくら又折かさしぬきかふる　衣に春をなをしたふ哉

述懐

世の中のうさを習と思はすは　なにゝなくさむわか身ならまし

此上句有同類候様ニ存候、但分明無覚悟候

惣而等類おほつかなきは、詠共あまた候へとも、

近代集等当時不及引勘候間、前後

しるし申入ニをよはす候

点十二首

冬日同詠五十首和哥

参議藤原宣秀

春十首

さむからぬ春しもなとか山はみな　霞のころもたちかさぬらん

百草もひとつみとりの春のゝに　なにをわかなとわきてつむらん

花さかぬ竹の小枝も春きてや　声を匂ひとうくひすの鳴

うつり香はかたみにのこれけふいく日　袖に馴こし梅はちるとも

きしによる色そゝひ行した水に　ひたしてそむる青柳の糸

空はたゝかすむと斗見るうちに　軒に音せぬ春雨そふる

たつね来ぬありと斗に先にほふ　花のあたりの山かせもかな

ちらは又よそのさかりやとひゆかん　庭の一木の花そうつろふ

〃いはぬ色といかてかいひしみな人の　心のはなにゐてのやまふき」二八

かすまても有明うすく弥生山　くれ行春のなこりはかりに

夏五首

をもけなる雪もいくへかうつきかき　かこひそへたる花のさかりは

たれに又よをのこすらん郭公　とひすてゝ行明かたのこゑ

ふかくたつ雲にあまりて山川の　岩こす水やさみたれの空

夏草の光りとそなるしけりあふ　中に色こき大和なてしこ

〃うき事もみ(かゝれとそ思ふ)には残らしみそき川　よとまぬせゝの水にまかせて

秋十首

おきのはそ先うちなひく風の音は　秋ともいまたきゝもわかぬに

天川ふたつの星の半天に　かけてたえせぬかさゝきの橋

花すゝきたれを定めてまねくらん　のへには人のしけきゆきゝに

一つらそまつ鳴わたる天つかり　都にいそく心しられて

籠のうちに露かふ暮もひろき野と　思ひなしてや虫の鳴らん

わか恋る妻をそなたと露のちる　跡をしたひて鹿のなく声

千里をもみるはかり也かけ清き　月やこゝろをさそひゆくらん
さかり成色にそかへる白きくの　うつろふうへにをける朝しも
夢さそふ嵐の音にたくひきぬ　ね覚の床にとをき砧も
うき物と思ひし秋もあやにくに　くるゝとなれはまたしたひけり

冬五首

はれくもりしくるゝ雲の外に又　あられ音して風そはけしき」二九
色ふかく今はたもろき木のはをは　さそふ嵐のとりとやはみん
浅きせやまつこほるらん水のうへと　みゆる石間に千鳥鳴なり
降つもるふもとの里は人もこて　峯より雪をさそふ山かせ
木こるをとのたえ行まゝにやかてはや　けふりそみゆるをのゝ炭かま

恋十首

人はいさしのふとたにもしらしかし　心のおくにまよふ恋路を
やすくしもなひかぬ人よわれに又　後はかはらぬ中と頼まん
〃つれなくとわれをも人やいひなさん　うきもつらきもたへてしたはゝ
みなとゝも袖をやいはん舟の行　海よりふかくせきし涙に
思ひねにみし夜の夢は夢ならて　とひしうつゝそ現ともなき
偽になくさめ置し言のはを　誠になして頼むはかなさ
逢せなきいもせの中の川上や　なみたの滝をはしめ成らん
まつは遅くかへるははやき恨をも　いひつくされぬ衣〳〵の空
契りても人のこゝろの朝ねかみ　おきわかれてそ思ひみたるゝ
かきやらんふては及はぬうらみをも　人にことはる媒もかな

雑十首

神祇

さしてけに仰かさらめや天か下に　みかさの山のひろき恵を
尺教
かしこきもをろか成をも捨しとや　さま〳〵とける法の言のは」三〇
〃夢はかりさむるときゝて鐘の音を　のちのよかけて驚くはなし

無常

人の上にみるとはすれと世間の　あたなる事そしらすかほ成

別

待やらて都をしたふ別路に　われもしはしと猶やとゝめん

旅

〃情あるもとひすてゝけり此まゝに　すめともいわぬ旅のかり庵
故郷にやすくかへるは心にて　猶ゆきかぬる山のさかしさ

祝

ことふきにおもふ千とせも万代も　ありへん物とみをそたのしむ

物名　朝かれい　御せん

わたるへき水よ浅かれいひやらは　来てこせむかふさとの川長

述懐

末かけて広きめくみのよにしあれは　愚か成身も猶や頼まん

点五首

冬日同詠五十首和哥

右兵衛佐藤原永宣

春十首

〃明ることみしより早くかすむ也　空にまたれぬ春や立らん
ふもとより日影ははれて立のほる　霞にたかき天のかく山」三一
鶯のはつ音ひらくる梅かえに　今いく日ありて花も匂はん
ねはかれぬたねやのこらて春のゝに　ふる葉も同しわかなゝるらん

谷川のこほりのうへに流るゝや　峯より落る雪の下水
とをさかる俤のみやかすむらん　みとりの空にかへる雁金
つく〳〵とみれは哀もふかきよの　月はかすむを光とやせん
雲と見し花のよそめはそれなから　匂ひそ袖のうへに成ぬる
〵くれは又いつれの花かやとならん　木の本つくす春の山ふみ
一とせはしたふにとまれをのつから　日かすくはゝる春もこそあれ

夏五首

たつねてもこゝにやきかん郭公　み山の月のあけかたの声
月もはや入江の蘆のはかくれに　光をそへてとふ蛍かな
〵草のはにちりそふ露もすゝしきや　こま打わたすのへの沢水
蔦むくらしける軒はにかゝりても　色にまきれぬ夕顔の花
〵ほともなく梢を過るゆふ立に　露をきあへぬもりのした草

秋十首

一葉さへまた散あへぬ朝風に　秋まちえたるそてのうは露
わりなきをしゐてやかくは契り剱　あまりまれ成ほし合の空
なにとなく一もとうへし荻のはに　いく夕くれの風をきくらん
〵見るかうちに猶数そへて夕きりの（数そひけりな歟）　はるゝ嶺よりおつる雁かね
浪の上は日かけもはれて朝霧の　一むらくもる沖のとをしま」三二
君こゆる波うちはへて白妙の　月にもさらす布引の滝
かけやとす露をよすかに花薄　月をまねきて秋かせそ吹
ありふれは浮世をたにも過す身に　よしや思はし秋の夕暮
わりなしや秋なき時もある物を　此ころしかの音をつくしぬる
しほれゆく草木をみれは露しもの　もよほす色に秋はくれけり

冬五首

〵おくふかく流れ出たる山川に　つきぬ落葉の色をみる哉
かりのこす山田の原のむらすゝき　たれ心して雪をみすらん
ゆく舟の跡さへ見えす浪あれて　雪ふきおろすひらの山風
つはさほす池の鴛鴦うちむれて　日かけにねふる庭の朝しも
むかひてもさむく成行うつみひに　閨の板まの霜夜をそしる

恋十首

それをしも人やとかめんもらさしと　思ふにつけてうちもむかはす
人のなさけ人をもわかはしたはしと　思ふ心を身にまかせはや
よしさらは我命さへつれなかれ　人の心のかきりをそみん
いかなりしときしも人を思ひそめて　かく迄身をはくたし果けん
忍ふれは人伝ならぬ玉札を　かへすにかこつ中たちもなし
〵うき身そといわんとすれは落そひて　人をことはるわかなみた哉
われさへも浅はかなりと思ふなよ　いとふにまけてみをつくす中
さもこそは契りし袖に浪こして　末の松山まつかひもなし」三三
くゆりわふる思ひもつらしふしのねの　けふりも今はたゝすなる世に
よしさらは人にも人よつれなかれ　うき身はけふとなくさみもせん

雑十首

神祇

雪しろき杉の梢に月落て　宮ゐしつけきみわの山本

尺教

〵八千度のその一たひもほとけには　生れあはてやまよひきぬらん
むまるへき身の行末を思へたゝ　仏もあたの世をそへたてし

無常

命にさて何にたとへん草の葉の　露はきえても又むすふらん

別

かりそめの別となるも悲しきは　明日しらぬみの旅の行末

旅

かりねするうき世のほかの草の庵　このまゝすさむこゝろとも哉

いく度かかりねのまくらそはたてゝ　明やらぬよのかねをきくらん

物名　つゝし　やまふき

しくれつゝしはしや野へに迷ふらん　やまふきこゆる風のうき雲

述懐

人ことにそのみち〳〵の残る世と　思へはいとゝ身をそうらむる

祝本書無之　点十一首」三四

僻案愚点百四十八首

権大納言実隆上

光あるいその

玉藻のかす〳〵に

あまのすさみの

みたれてそ

おもふ

御返し　御製

かきよするいその

もくつのかす〳〵に

ひとりをわくる

なみのしらたま

（半丁分空白）」三五

【略解題】

本書は、本稿において翻刻した高松宮本の他に、宮内庁書陵部蔵（五〇一―八〇二）本・同（一五一―一五二）本が知られている。勝仁親王（後の後柏原天皇）の御所で催された歌会詠とされる（井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期』〈明治書院、一九七二初版・一九九一改訂新版〉一〇頁）。『公宴続歌』に収載されていない。後土御門天皇・勝仁親王の詠が『列聖全集　第五巻』に翻刻されている。次に書誌を掲げる。

縦一八・五糎×横一三・四糎。後補の薄青色地雲母引蜀江錦表紙の左肩打付書外題「磯の玉藻」。内題「詠五十首和歌　明応八年十一月廿日」。前遊紙の左肩に「磯の玉藻」とあり、これが原外題か。袋綴一冊本。墨付三五丁。遊紙前一丁。半丁一〇行。和歌一首一行書。実隆による合点あり。奥書・識語等なし。

なお、「磯の玉藻」という題名は、巻末の後土御門天皇の贈歌の歌句によるものと思われる。

底本には、書陵部蔵二本と比校すると、三首の脱落歌がある。以下に書陵部蔵（五〇一―八〇二）本に拠りこれを補う。

行かへるみちこそあらめかきかはす　ふみをはゆるせもしのせきもり

（尊伝「恋十首」・「むもれ木と〜」ト「一方に〜」ノ間）

夕すゝみいくかもあらしさきたちて　松はたえ〳〵あきかせのこゑ

（元長「夏五首」ノ末尾）

祝

君はおさめ人はつかふるみち〳〵の　すきにたゝしき御代そかしこき

（永宣「雑十首」・「旅」ト「物名」ノ間）

いずれも「一首不足本書トモ」等と注記されていることから、親本の段階でこれらの三首は欠脱していたと考えられる。また、作者名の位置が、底本では各人詠の端作りの下に位署として記載されているが、書陵部蔵二本では合点のある詠の下に記されている。そして、式部卿邦高親王の五十首が底本では勝仁親王の後にあるが、書陵部二本では尊伝（不遠宮）の後にあるという相違がある。

（酒井茂幸）

3 宗祇三回忌追善和歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H－六〇〇－三四二）〕

【釈文】

侍従大納言勧進　永正元七廿九」（外題〔打付書〕）

春たつけふの

（貼紙）さえなから春たつけふのならひとて　かすみかすまぬよもの空かな　政－家

きえあへぬ雪の

（貼紙）今朝みれはきへあへぬ雪のうへになを　ふるのゝわかな誰かつみてむ　冬－良

うくひすさそふ

（貼紙）山ふかみうくひすさそふたよりには　花のやとりをいさたつねみん　尚－通

わかなつみけり

（貼紙）かすか野にうち出てみれはしら雪も　ふるとせ（し歟）なからわかなつみけり　実－淳

雁かへるなり

問すてゝかりかへる也みし人の　なきには誰にこと伝もせむ　宣胤

花をしみれは

とゝまらぬ花をしみれはあはれその　老木はむへも苔にくちける　実隆

たえて桜の

（貼紙）つゝみこし霞の袖も山かせに　たえて桜のにほふそらかな　実香

けふこそさくら

おもへまし花もはるなきはるの夢　けふこそ桜さくとみるとも　政為

花見かてからに

（貼紙）老か身を花見かてらにとふ人の　心の色も春にしれとか　為広

花のところは

いまはそのおもかけをのみしたふかな　花のところは春の山かせ　元長

さける藤なみ

名残おもふ春になさけの色かへて　こと葉の花もさける藤なみ　基富

春はいく日も

（貼紙）さくをおもひ散をなけきの花にくれて　春はいく日ものこらさりけり　雅俊」一

春にをくれて

（貼紙）おもへとも春にをくれてひとりのみ　かひなき身をや鶯の音に　雅俊

あなうのはなの

（貼紙）わかれにし春をやいとゝへたつらむ　あなうの花のさけるかきほは　公助

なとほとゝきす

うらみはやなと時鳥声にたに　しのふる中の遠さかるらん　済継

はな橘に

（貼紙）ちきりをかははな橘にほとゝきす　こそのやとりをわすれやはせん　公条

よるはほたるの

老の後もよるはほたるの影をのみ　あつめし窓をしのふはかなさ　為孝

夏はうつせみ

夕たちのきほひに分てやま松の　濤（？）さへなつはうつせみの声　興基

かたへすゝしき

（貼紙）秋を色にむすふ清水のわきかへり　かたへすゝしき松の下かけ　為和

いな葉そよきて

（貼紙）限なくさひしき秋のゆふへかな　しかのなくねにいな葉そよきて　公瑜

もみちを橋に

（貼紙）川かみの紅葉をはしに吹すてゝ　我山水をわたる秋かせ　資直

むしの音きけは

（貼紙）よひのまもむしの音きけはから衣　ひまこそなけれつゆのかたしき　肖柏

おのへのしかは

いかに見し松さへあらぬ夕きりに　たへて尾上の鹿はなくらん　道堅

月のかはらも

うつり行秋のすゑ葉そあわれなる　草木にあらぬ月のかつらも　泰諶」二

月の光し

くらからぬ月の光し身にそはゝ　見さらん秋のやみもまよはし　雅連

萩の下葉も

（貼紙）ちらすなよ萩の下葉も露ふかし　花こそかせをまちならふとも　玄清

秋は色〳〵の

なかめわふる心ひとつの空よりは　秋は色〳〵のあはれともなる　梵光

露ももらしを

した荻にかけそあたなるかゝれとて　露ももらしを月の夕かせ　頼亮

うつろふ秋に

めくる世は夜ひのいな妻今朝の露　うつろふ秋に我そおとろく　成郷

山ちのきくの

なかれいつる水の心をくみてみすは　山路のきくの秋やをとはめや　親栄

みなとや秋の

（貼紙）紅葉するこしの湊や秋の色に　うつろふ波のこゑしくるらん　為孝

冬そさひしさ

（貼紙）夕されは冬そさひしさまさきちり　あられ乱てるゝをとはかりして　為和

衣手さむし

（貼紙）薪こるころもてさむし朝な〳〵　野やまの霜の色を深めて　元長

あられみたれて

（貼紙）床の上にあられみたれてかたしくも　さむけき袖のしのふもちすり　実一淳

雪ふりしきて

みし人のあらましかはとおもふにも　雪ふりしきてなき跡はうし　政一家

あまきる雪の

（貼紙）月かけはあまきる雪のふらぬ日も　霜くもりにてさたかにもなし　宣胤」三

ふりをける雪に

あはれさそ今年も三の衣手を　ふりをける雪にほしやは侘まし　興基

としの暮ぬる

（貼紙）しら雪のふりまさり行身のうへに　いとへはしゐて年のくれぬる　基富

たひゆく人を

しらさりきたひ行人をとゝめえて　つゐのわかれにならむ物とは　尚通

なにかわかれの

世の中はなにかわかれのほかならむ　有はてぬ身に思しらすや　政為

はかなき世をも

みつゝこしはかなき世をもことしより　なをおもふへき数はそひけり　済継

あるをみるたに

（貼紙）やみの中にあるをみるたに月草の　うつり行世はくまなかりけり　道堅

たえす涙の

わか袖にたえす涙のゆく川や　ふちやあふ瀬にかわる世もなき　公助

さらぬ別の

夢なりとさらぬ別の今さらに　おとろかれてもうつゝとはなし　雅俊

年へぬる身は

たつ千とりあとものこさすはま松の　としへぬる身は浦風そふく　肖柏

なにかつねなる

（貼紙）世にふれはなにかつねなるうれしさも　うさもとをらぬ心なりけり　実望

おもひつきせぬ

いつのまにとしの三とせのあなたそと　おもひつきせぬ世をそおとろく　実隆

うさこそまされ

（貼紙）あはれ世をおもひしる身に秋のきて　うさこそまされ袖のゆふ露　実香」四

夢かとそおもふ

床のうへに消にし露のたま〳〵も　みしはいかなる夢かとそおもふ　有注為広

すゑの代までの

ひろひをきし玉の声あることのはと　すゑの世までのかたみにそみる　冬一良

侍従大納言勧進

永正元年七月廿九日宗祇法師追善第三回

【略解題】

本資料は高松宮本が孤本である。全文の翻刻はこれまで無く、宮内庁書陵部蔵『公宴続歌』にも収載されていない。井上宗雄「中世歌書管見―「持為卿詠」・「宗祇三回忌和歌」―」（『立教大学日本文学』第二六号、一九七一・六）〔以下「井上論文」と略称〕に紹介があり、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期』（明治書院、初版一九七二、改訂新版一九九一）にも論及がある。永正元年（一五〇四）七月二九日の宗祇の三回忌に三条西実隆が勧進した追善和歌である。古今集を句題とし、四季・恋・離別・哀傷・雑の順に詠歌出来るよう配慮が成されている。

次に書誌を掲げる。

縦二八・三糎×二〇・四糎。赤香色地に藍色三つ巴入五筋斜格子表紙の左上に「侍従大納言勧進〈永正元七廿九〉」と打付書の外題あり。内題なし。尾題に「侍従大納言勧進／永正元年七月廿九日宗祇法師追善第三回」とある。袋綴一冊本。半丁一二行、和歌一首二行書。一部の歌頭に藍色の貼紙がある。全七丁、墨付四丁、遊紙前一丁、後三丁。江戸中期写。

井上論文に指摘があるとおり、実隆の家集『再昌草』に実隆詠二首が、『徳大寺実淳集』に実淳詠が、『宣胤卿記』に中御門宣胤詠二首が見える。以下にこれを掲げる。

卅日　宗祇法師第三回、古今一句を題にて五十首歌すゝめ侍しに

花をしみれは題民部卿〈為広〉　読師甘露寺　講師丸

とゝまらぬ花をしみれはあはれその　老木はむへも苔にくちぬる

いつのまにとしの三とせのあなたそと　思つきせぬ世をそ驚く

（『再昌草』五六三・五六四）

宗祇法師第三回とて侍従大納言すゝめ世侍りし中に

春日野にうち出てみれはしら雪も　ふるとしなから若なつみけり

（『徳大寺実淳集』四六六）

廿三日辛亥　晴、明日内裏御月次短冊付甘中、又来卅日宗祇法師第三回、拾遺亜相勧進哥二首遣之（内裏月次短冊和歌略）

雁かへる（宗祇三回追善）　問すてゝかりかへるなりみし人も

なり　なきには誰にこと伝もせん　ゝゝ（宣胤）

政為卿出題

あまきる　月影はあまきる雪のふらぬ日も

雲の　霜くもりにてさたかにもなし

（『宣胤卿記』）

井上論文は、『再昌草』の引用を、宮内庁書陵部蔵御所本の翻刻の『桂宮本叢書』に拠ったと思われるが、同鷹司本を底本とする『新編私家集大成』では、五六三「苔にくちぬる」→「昔くちける」、五六四「あなたそと」→「あなたその」の異同がある。そして、『宣胤卿記』に依ると、実隆の勧進で、題者は政為、七月二三日頃題が配られ、三〇日に実隆邸で披講されたようである。また、井上論文には指摘が無いが、『公条公集』二七、『肖柏集』一八〇一、『政為集』一一九一にそれぞれ他出が見出される。

はな橘に

ちきりをかは花橘にほとゝきす　こそのやとりをわすれやはせん

（『公条公集』）

自然斎宗祇第三回に、前内府すゝめ給ひし五十首に、むしのねきけは　勅題

よひのまも虫の音きけはから衣　隙こそなけれ露のかなしさ

（『肖柏集』）

何かわかれの　宗祇三回実隆卿すゝめ侍るに

世中はなにか別れの外ならむ　ありはてぬ身に思ひしらすや

（『政為集』）

前述のとおり、題者は政為であり、『肖柏集』に「勅題」とあるのは不審である。

底本では歌題が歌頭にあるが、適宜行間に移動させた。　（酒井茂幸）